

# 広島市における統合保育の実態調査(1)

— 保育上の困難点や対応方法を中心として —

若松 昭彦  
(1994年11月24日受理)

## An Investigation of the Realities of Nursery Schools Practicing Integration in Hiroshima City (1):

### Focusing on the Difficulties and Worries in Nursing

Akihiko WAKAMATSU

**Abstract.** The main purposes of this study were to investigate difficulties and worries in nursing by using questionnaires, and to examine the way of solving those problems. The subjects were nurses working in the nursery schools in Hiroshima city. And numbers of nurses and nursery schools were respectively 91 and 49. We investigated the number of children with handicaps, age of them, sex distinction, type and degree of handicaps, etc. And we asked concrete contents of difficulties and worries.

The findings were as follows:

1. There were many difficulties in nursing, and some variations of difficulties according to a type of handicaps (mental retardation, Down's syndrome, autistic disorder).
2. Experienced nurses tried to understand the feelings of children with handicaps and to meet their requirements correctly. And also, they led children positively and confidently. But, inexperienced nurses had a great many worries and hesitations in nursing.
3. All of the nurses were pressed by nursing, so they couldn't afford to grasp the individual characters of each children.

## はじめに

近年、障害を持つ幼児の保育を一般の保育所や幼稚園の健全児集団の中で行う、いわゆる統合保育の実践が各地で広がりつつある。広島市においても、昭和55年から指定園方式、そして昭和61年からは全園方式で心身に障害を有している児童を保育所に受け入れてきている。平成5年度には、公私立計133か所の保育所中、71園が計145名の障害児を受け入れており、措置児童数に対する割合は1.13%に達している。障害児保育の対象児数は今後も増加していくことが予想されるが、それにともなって保育環境の整備、改善などと並んで保育者の研修もますます重要になってくると考えられる。そして、こうした研修を効果的に進めるためには、研修の参加者がどんな問題を抱え、何を求めているのかを的確に理解していくことが不可欠であろう。そこで本研究は、アンケート調査を用いて保育者の悩みやニーズを探ることにより、広島市における障害児保育の現状を把握する

とともに、得られた結果を保育現場や保母研修に還元していくことを通じて、より充実した統合保育の実施に寄与することを目的としている。

## 方 法

### 1. 調査対象・方法

平成6年度に広島市が実施した、「障害児保育保母研修会」に参加した公私立の保育所保母計121名が調査対象である。障害児保育の経験がこれまでなく、平成6年度に初めて障害児を担当した保母を対象とした第一回目の研修会は同年7月19日に行われ、43園より63名の参加があった。また、障害児保育の経験がある保母を対象とした第二回目の研修会は同26日に開催され、46園より58名が参加した。この研修会は、障害児保育を行っていく上での基礎的な知識の習得を目的として平成3年度より行われているもので、研修会の講師を務めた船津がアンケート用紙を配布後、自由記述による回答を依頼し、その場で回収した。

## 2. 調査項目

調査項目は次の3つである。1)園が現在受け入れている障害児の人数、年齢、性別、困っていることなどを中心とした子どもの様子。2)その他に対応に困っている子どもの様子。3)子どもとかかわる上で、記入者が日頃心がけていることや悩んでいること。また、園名の記載は記入者に一任した(資料のアンケート用紙参照)。

## 結 果

### 1. 回収率等

園名無記入の回答は、受け入れ障害児やその他困っている子どもに関して園名記入のものと重複する可能性があるため、記入者の心がけや悩みの項目のみを分析の対象とした。第一回研修会では46名から回答があったが(回収率73.0%)、無記入などの無効分を除いた有効数は41であった

### 〔資料：アンケート用紙〕

お願い：子どもへの理解を深め、より充実した統合保育を行なっていくための参考資料としたいと思います。以下の設問にお答え下さい。(船津)

差し支えなければ 園のお名前 \_\_\_\_\_ (TEL) \_\_\_\_\_

1. 先生の園では、統合保育の対象となる子どもを何名預かっておられますか。また、その子どもの年令と性別を教えてください。
2. 1でお答えいただいた子どもは、どんな子どもですか。(困っておられることなど)
3. 1でお答えいただいた子ども以外に、困っておられる子どもがいましたら、どんな子どもなのかを教えてください。
4. 先生が日頃子どもとかかわりをされるうえで、心掛けておられること、またお悩みのことがあれば教えてください。

(有効回収率 65.1%)。このうち、園名無記入は 15 であり、26 園から子どもについての資料が得られた。また、第二回研修会では 45 名から回答があり(回収率 77.6%)、有効数は 41 であった(有効回収率 70.7%)。このうち、園名無記入は 14 であり、子どもに関する資料が得られたのは 27 園であった。以下、それぞれの有効回答分を経験なし群、経験あり群とする。経験なし群、あり群で 7 園の重複があったために、計 46 園から子どもに関する資料が得られたことになる。なお、本稿の表などに掲載した回答の記述は、原文の内容を文意に沿って簡略化したものである。

## 2. 現在受け入れている障害児について

### (1) 障害別の人数

表1 障害, 男女別の受け入れ障害児数

	男児	女児	不明	計
精神遅滞	14	9	1	24
ダウン症	8	13	0	21
自閉性障害	14	3	0	17
肢体不自由	3	2	0	5
言語発達遅滞	2	2	0	4
難聴	0	3	0	3
情緒障害	2	0	0	2
多動	0	2	0	2
視覚障害	0	1	0	1
重度障害	1	0	0	1
不明	19	6	0	25
計	63	41	1	105

表1は、現在受け入れている障害児について経験なし群、あり群を込みにした障害、男女別の人数を示したものである。「精神遅滞」の中には、他にもダウン症児や自閉症児などが含まれている可能性もあるが、ここでは記入者の記述に従った。また、「発達遅滞」、「発達の遅れ」は「精神遅滞」に、「自閉症」、「自閉(的)傾向」は「自閉性障害」に、「言語の遅れ」、「言葉が出ない」、「言葉の遅れ」、「言語障害」は「言語発達遅滞」にそれぞれ含めた。さらに、「視覚障害」の子どもは精神遅滞を合併している。他にも心臓疾患や発作などを合併している子どももいるが、ここではいずれかのカテゴリーに含めている。合計 105 名の子

どもが受け入れられており、精神遅滞、ダウン症、自閉性障害でその約 6 割を占めていた。また、「重度障害」の子どもは、右半身マヒ、言葉の遅れ、心臓疾患を併せ持っており、加配保育が 8 時間ついている状態で、体調やけがなど常に心配がつきまとうと述べられていた。

### (2) 保育上の困難点等

表2 領域別の困っていること等の記入があった子どもの数

		精神遅滞	ダウン症	自閉性障害
子どもの人数		24	21	17
記入があった人数		13	10	9
領域	言語	4	1	2
	多動	1	0	2
	こだわり	0	0	3
	食事	0	0	3
	集団参加	2	2	2
	運動	4	2	0
	依存的	0	2	0
	保護者	6	1	1
	午睡しない	1	0	1
	場面への慣れ	1	0	2

表2は、やはり経験なし群、あり群を込みにして、困っていることなどを中心とした子どもの様子に関する記述から、該当する領域について記入があった子どもの人数を、精神遅滞、ダウン症、自閉性障害の各々について示したものである。他の障害や「不明」については、記述がない場合も多いことから省略した。また、ここでは2名以上に記入のあった領域のみを取り上げている。

具体的な記述内容は、「言語」については、言葉5つ位、単語レベル、言葉の遅れ、言語不明瞭(以上精神遅滞)、発語遅れ(ダウン症)、言葉なし(自閉性障害)、「多動」では、特に行事は大変(同)、「こだわり」では、水に執着(同)、「食事」では、偏食、保育がないと他児の食べ物を食べる、食事とらずお茶や菓子のみ(同)、「集団参加」では、保育がないと部屋出る、他児との関わりなく保育に密着(精神遅滞)、指示に従えず集団はずれていることも多い、遊びや興味が違い友達ができにくい(ダウン症)、他児の働きかけを嫌がる、大人との関わりを好むが他児と関われない

表3 障害児保育の対象児以外に対応に困っている子ども

性別	年齢	子どもの様子・困っていること
?	?	多動。家庭状況から乱れることが多い。
男	3	言語不明瞭。取り合いでパニック。家庭複雑。
男	1	視線合わない。多動。児相勧められず宙に浮いた状態。
?	?	両親夜勤生活不規則、情緒不安定。時々乱暴、物投げる。
男	4	乱暴。話聞かない。集団に入りにくい。
?	?	指示が入りにくい。かんしゃく。関わり下手。医院指示とけじめのある対応の必要性に悩む。
?	?	話を理解していない。遊べず走り回っている。追いかけてはしくて他児にちょっかい。
男	4	こだわり。乱暴。一人の子を徹底的にやっつける。
?	?	自分勝手な行動。すねたりはぶてたり。幼い面ある。注意獲得?
?	?	落ち着きない。話しても目が合わない。
?	?	落ち着きない。視線合わない。情緒不安定。
男	6	落ち着きない。したいことのみ集中。要求以外は話さない。
?	?	すぐ手が出る。他児をこき使う。
?	?	多動。衝動的に乱暴、予想しない行動。
男	4	食事以外は部屋にいない。テレビのコマーシャルの独り言。
?	?	言葉が少ない。発語不明瞭。
男	3	応答が別のこと。保育の名前と顔一致せず。
?	?	会話で話かとび、目が合わなくなる。
男	3	乱暴ひどい。
男	5	集団からはずれる。攻撃的。遊び偏る。運動。話し聞けない。
男	5	不安定。やる気あるが、自己中心的でできないとパニックも。一人遊び好き。
男	4	集団に入れない。コミュニケーションとれない。
男	4	乱暴。物の奪い合いでトラブル。年上にも向かい泣かされる。
?	?	関わりたいが、仲間はずれにされるとすぐ泣く、いじめられていると思込む。
男	4	言語不明瞭、三語文まで。色形認識不可。絵本や話興味示さず。
?	2	言葉出ない。理解も低い。他児との関わりない。昼寝しにくい。目が離せない。
男	3	奇声。言語認知遅れ。
男	3	脚湾曲、バランスとりにくい。言葉出ない。
?	3	目合わず。一方的に話す。応答関係持てない。
?	4	乱暴。言語表現力不足にもよるのか?
?	?	視線合わない。指示通らない。ルールを守らないことで気をひく。話が一方的で会話にならない。
?	6	今年年生。知的面極端に落ちる。極端な恥ずかしがり。
男	2	小さい子に乱暴。人の物とる。集中短い。学習に時間かかる。よく転ぶ。視線合わない。
女	4	身辺自立不安定。見通しがない。思い通らないとパニック。興味続かない。集団遊び嫌がる。母親は厳しく、両者への対応に悩む。
?	3	言葉の遅れ(オウム返し)
男	4	入園まで心臓疾患で病院生活。言語不明瞭。生活面の模倣不可で指示必要。
男	5	短気で乱暴。

(自閉性障害)、「運動」では、手先の動きが未熟、両足跳びができない(精神遅滞)、歩行できない、歩行が不安定で衝突して転ぶので心配(ダウン症)、「依存的」では、午睡の後、服を着脱してくれるのを待っている(同)、「保護者」では、親子の関わりがうまくとれず専門機関に通う主旨が分かっていない、保護者が多忙でコミュニケーションをとりにくい、母親が神経質、家庭の力が弱く継続した登園が困難、長い休みでは歯磨きや着脱等先取りされ退行、母親が手を出しすぎたり時々焦ったり放置する(精神遅滞)、母親に養育意欲がない(ダウン症)、就学を前に遅れを認めたくない母親への助言に悩む(自閉性障害)、「場面への慣れ」では、初めてのことにためらい(精神遅滞)、別の場所である運動会が不安、新しい場面への慣れにくさ(自閉性障害)などである。これらの他に、精神遅滞では、気持ちの切り替えに援助が必要、特定の年少児を攻撃する、興味が移り変わる、うまくいかないことは後込みする、ダウン症では、拒否態度が多く新しい事に取り組めない、遊びに入れなくなると2才児クラスで遊ぶ、気に入らないと物を投げる、自閉性障害では、高所に上がる、性器を触る、他児が泣くとパニックになる、植物を抜く等の行動があげられていた。

表2より、精神遅滞については「言語」や「運動」と共に「保護者」の問題が他と比べて多く出されている傾向が認められる。また、ダウン症では全体的に問題とされる点は少ないようであるが、年長になるにつれて他児と比べての遊びや興味のずれが大きくなり、個人の活動を大切に、気のすむまで好きな遊びをさせて発達を促していくべきか、それとも集団の中で同じ体験をさせるべきか、両者のバランスに悩んでいる様子が記述内容からうかがわれる。一方、自閉性障害は、「こだわり」、「食事」、「多動」、「場面への慣れ」など他にあまり見られない問題点を、「言語」や「集団参加」などと併せて多彩に示していると言えるであろう。

ここでは直接尋ねていないが、子どもにかかわる上での配慮点についても、いくつかの記述が見られていた。それらは、精神遅滞では、「なるべく他児と一緒に行動をする。できないなりに保育と一緒にするようにしている。興味のない絵本、テレビでは他児のそばで積み木をさせている。」

ダウン症では、「トイレを1つ洋式にした。」、自閉性障害では、「良いことはしっかり認め、いけないことは繰り返し伝える。」、「先ず母との世間話で信頼関係を作る。できないと決めつけるのではなく、可能性を大切にしたい。」、「スキンシップ、ゆさぶり等喜ぶかわわりを多く持つ。一日の流れを決める。」、「経験を増やし一緒に共感したり対象物を共有して発語を促したい。」などであった。

さらに、午後は加配保育がいなくなり、放置されがちになる、午睡しない、脳性マヒの子どもの介助に困るという記述が2名に見られていた。なお、この2名は経験なし群に属していた。

### 3. その他に困っている子どもについて

表4 領域別の困っていること等の記入があった子どもの数

領 域	人 数
言語・コミュニケーション	17
集団参加	11
乱暴	11
視線	7
多動・落ち着き	6
かんしゃく・パニック	5
保護者	3
運動	3
情緒不安定	3
興味の持続	2

経験あり群23名、なし群16名、合わせて39名の子どもの記入されていた。表3は、困っているというほどではないと書かれていた2名を除いた37名の様子を示したものである。障害児保育の対象児ではないため、障害名が記入されている子どもはないが、精神遅滞や自閉性障害などが推定される子どもがいることも見て取れ、様々な不適応行動への対応に苦慮していることがうかがわれる。表4は、2名以上に記入のあった領域を取り上げ、該当する領域に何らかの問題を示す子どもの人数を示したものである。「言語・コミュニケーション」、「集団参加」、「乱暴」などに問題を持つ場合が多く、「視線」、「多動・落ち着き」、「かんしゃく・パニック」等も比較的多く認められている。一方、「保護者」に関する指摘は3名に見られていた。

表5 障害児保育の経験あり、なし別の記入者の保育上の悩み

	経 験 あ り	経 験 な し
保育のゆとり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゆとりを持ち一人ずつに接したいが、ゆとりがなくなすぐイライラ。</li> <li>・障害の有無に関わらずじっくり関わりたいが、時間がなくワーワーと過ぎていく。</li> <li>・個々の様子じっくり見守りにくい。ゆったりつきあうと一日が消化できない。</li> <li>・34名中の2名で個々と接する余裕がない。</li> <li>・ゆっくり接したいが生活に追われる。</li> <li>・ゆとりをと思いながら短気に怒ってしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心のつながりを深く持ちたいが、生活に追われ、できない子への指導くらいしかできない。</li> <li>・時間がなく、手を出してしまうことが多い。</li> <li>・他児を見ながらの受容は難しい。</li> <li>・保育の見通しを考え、具体的な遊びやその準備など環境を整える時間がない。</li> </ul>
保護者との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者と連携したいが本音の話が困難。</li> <li>・母親に統合保育の中で治ると意識があり、すれ違いを感じる。一生懸命なのでちょっとした言葉が大きな期待につながることもあり、対応に配慮がある。</li> <li>・母親の要求強く、つられて焦ってしまう。</li> <li>・多忙等で保護者とのコミュニケーションとりにくい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親が他人の目を嫌っており、行事等で気をつかう。</li> <li>・親は認めたくない境界線の子の保護者対応に悩んだ。</li> <li>・親が悲観的でコミュニケーションとりにくい。</li> </ul>
保育者間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任間の話し合いうまく出来ない、時間もない。一貫した関わりできにくい。</li> <li>・加配保育と話す時間がない、指導も必要。加配保育臨時は不適切。</li> <li>・幼いと思える子をユニーク、個性、かわいいと捉える他の保育者の見方に影響されていくのではないか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加配保育は自分の先生と思いがたえてしまう。</li> <li>・加配保育のつく前後が手薄で、目がしばしば届かない。</li> <li>・8時間の加配がほしい。</li> <li>・保護者は午後の保育を望むが、午後は加配保育おらず難しく思う。</li> </ul>
他児との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年長児の一部に差別的な言動が見られる。家庭環境にも原因があるのか？</li> <li>・意図的に関わらせることには抵抗があるが、他児は自分のことで精一杯で配慮に悩む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最近の子は言葉よりすぐ手が出る。障害児いじめが出ないか、初めてで不安。</li> <li>・年少児だが差別しているようなこともあり、今後の指導が難しくなる。</li> <li>・クラスの仲間として認められているのか。</li> </ul>
他の悩み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身の保育に悩み、障害の子がおろそかになっているのではないか。</li> <li>・園自体の問題で悩む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入普通児が心を開いてくれない。</li> </ul>
子どものかかわり等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集団になった時、子どもの気持ちがかめない場合がある。</li> <li>・人の立場になって考えたりすることの難しさ。</li> <li>・乱暴な子についているので他児と自由に遊べない。</li> <li>・どの程度1対1の関わりを持つか。</li> <li>・自閉傾向の子どもに強制すると今まで食べていたものまで食べなくなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見守る、待つを心がけているが、難しい。</li> <li>・生活リズムに乗らない子、一人が好きの子への対応。</li> <li>・遊びなどを通じてつながりが持ちにくい、集中できない。</li> <li>・欲求表現だと分かってはいるが、傷つけられたりすると嫌悪感を持つ。</li> <li>・発達を促す場や遊びの提供。</li> <li>・安全と離れて見たい等のバランス。</li> <li>・叱る時、そうやった気持ちをくみとり、その上でいい悪いを教えていきたいが、伝わらない場合もあり、伝え方に悩んでいる。</li> <li>・いろいろほめていきたいが、叱ってばかりではないか。</li> <li>・ADLできることは気付かせてやらせているが、その分時間的な差がでる。</li> </ul>
計	22	24

表6 障害児保育の経験あり、なし別の記入者の保育上の配慮点

	経験あり	経験なし
子どもの気持ち	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちがどうなのか。</li> <li>・子どもの声をよく聞いて話をしていく。</li> <li>・気持ちや要求を大切に、こちらの都合で振り回さないようにしたい。</li> <li>・何を求めているのか。</li> <li>・じっくり話を聞く。</li> <li>・気持ちをしっかりと聞いてゆったり受け止める。</li> <li>・意志をできるだけ聞き出す。</li> <li>・聞き上手になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できるだけ子どもの気持ちになって接するよう心がけている。</li> </ul>
観察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先ず生活や遊びを観察し、関わってきたりサイン発した時に思いを受け入れ信頼関係を作っていく。</li> <li>・どんな関わりが一番いいのか考える。援助か見守るか。</li> <li>・状態や様子を常に見ながら援助点を見極める。</li> </ul>	
触れ合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキンシップを持つ。</li> <li>・スキンシップ行動を受容し目を合わせていく。</li> <li>・1対1で応答する時、どこかに触れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキンシップを持つ。</li> </ul>
遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できるだけ子どもの関わりの中ですごす。</li> <li>・1対1でしっかり遊ぶ。</li> <li>・楽しんで、一生懸命遊ぶ。</li> <li>・十分ではないが接し遊ぶ。</li> <li>・少しでも1対1の時間を持つ。</li> <li>・今は1対1を5～10分持って信頼関係、気持ちの表出を作っていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1対1で関わるようにしている。</li> <li>・遊び、ふれあい。</li> </ul>
言葉かけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目を見て言葉かけ。</li> <li>・行動起こす際は呼名し、見通し持てるような言葉をかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目を見てゆっくり話す。</li> </ul>
ほめる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほめる</li> <li>・少しの事でも出来たらほめ、それを保護者に伝えて共感していく。</li> <li>・出来るようになったことをその都度ほめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・しっかりほめる。</li> </ul>
メリハリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場をとらえて叱る、できたことはしっかりほめる。</li> <li>・メリハリやけじめをつけた態度。</li> <li>・メリハリをつける。</li> <li>・良い悪いのけじめ。</li> <li>・危険、いけないことは目を見ながら簡単な理由を話し知らせていく。</li> <li>・一貫した関わり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他児と同じように心がけている。</li> <li>・障害の特性を考慮しながら基本的なこと、やっていいこと悪いことの区別等他児と同じように保育している。</li> <li>・表情でしっかり表わす。</li> </ul>
笑顔	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明るく接する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共感、笑顔に心がけている。</li> <li>・笑顔やなごやかな雰囲気の一部などリラックスできる環境づくり。</li> <li>・できるだけ笑顔で話しかける。</li> </ul>
教育的自立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活習慣の自立。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不明瞭な言葉は正しく返す。</li> <li>・選択肢を与える言葉がけて自主性を伸ばす。</li> <li>・ことばは選択肢を使う。</li> </ul>
保育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな経験を通じて一緒に笑ったり感動したりできるような保育。</li> <li>・動物物の世話、地域との関わり等を通しのびのびと遊べるように。</li> <li>・心が豊かに育ってほしいと思っているが。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然に実際に触れさせて興味を持てるように話をしている。</li> <li>・楽しめる活動をできるだけ取り入れる。</li> </ul>
他児との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他児の働きかけ、他児への関心を自然な場面です。</li> <li>・他児を意識し、丁寧な言葉かけをする。</li> <li>・子どもの持ち味を生かせる場面を作り、クラス全体で友達を認め合っていけるようにしている。</li> <li>・子ども同士の交わりを大切にします。</li> <li>・できるだけ集団に入れるよう言葉かけする。</li> <li>・他児と関わって楽しく遊べるように。</li> <li>・落ち着いてから集団に誘う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達との仲介に入りたい。</li> <li>・他児と関わりがもてるように。</li> </ul>
保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者と連携とれた時には成果あがるように思う。その日の活躍など話し糸口見つけ徐々に関きたいことに入る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者への働きかけ不十分で、園全体として取り組んでいきたい。</li> <li>・保護者との信頼関係、情報交換。</li> </ul>
保育者間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加配保母と話し合う。</li> <li>・加配保母と連絡とったりして、小さい成長にも気付き、次の関わり方を考えていく。</li> <li>・遊びあきると加配保母が違うのに誘う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当には甘えさせ、私は他児のように観ている。</li> </ul>
園	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受け入れについては保母一般に配慮し、先ず信頼関係を作る。</li> <li>・ケース会議で加配保母と話し合う、園全体で取り組んでいる。</li> </ul>	
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育定的楽観的に考えていく。</li> <li>・なるべくゆったり接する。</li> <li>・人格を尊重しながら安心できるような受容的関わり。</li> <li>・自分がされて嫌なことはしない甘わない。</li> <li>・子どもをかかわく思い好きになる気持ち。</li> <li>・特別扱いしない障害児もいるが、乱暴な子どもには難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害児がいることで他児も伸びていくという視点をもつ。</li> <li>・欲求と発達の目安のバランスを考えたい。</li> <li>・店場所を把握する。</li> <li>・健康状態に注意。</li> <li>・いい加減な答え、保母の誤りを認めない等をやる。</li> <li>・一緒に行動、共感。</li> <li>・子どもや親、他の保育者から学ぶ姿勢。</li> </ul>
計	55	31

#### 4. 子どもとかかわる上での心がけや悩みについて

##### (1) 保育上の悩み

表5は、子どもとかかわる上で記入者が日頃悩んでいることについて、経験あり群、なし群ごとに分類した結果を示したものである。経験あり群からは18名が、のべ22の、また、経験なし群からは21名がのべ24の悩みを記述していた。

表5の「保育者間」の記述内容からは、経験なし群の方が加配保母の必要性をより強く感じていることが示唆されるようである。経験あり群にはそうした傾向は認められず、むしろ加配保母との連携や保母間の指導の一貫性などに関する問題点が指摘されている。また、「子どもとかかわり等」の部分に両群の差が最も表われており、やはり経験なし群の方が子どもへの対応に様々な悩みや迷いを感じていることが示されている。一方、障害児保育の経験の有無にかかわらず、個に応じた十分な対応がしづらい日常保育場面での多忙さは共通しており、また、保護者との関係でも同じように対応に腐心する場合も見られていると言えよう。

##### (2) 保育上の配慮点

表6は、子どもとかかわる上で記入者が日頃心がけていること、配慮している点について、経験あり群、なし群ごとに分類した結果を示したものである。経験あり群からは26名が、のべ55の、また、経験なし群からは17名がのべ31の配慮点を記述していた。

領域別に見ていくと、「子どもの気持ち」に関する記述は経験あり群では8名に見られたのに対して、経験なし群では1名のみ認められた。また、「観察」は3名対0名、「触れ合い」3名対1名、「遊び」6名対2名、「はめる」3名対1名、「メリハリ」6名対3名など、同様に経験あり群の方に記述が多い傾向が見られた。さらに、「他児との関係」も7名対2名、「保育者間」3名対1名、「園」2名対0名などという結果であった。一方、「笑顔」では1名対3名、選択肢を用いた言葉がけなどによるかかわりを意図した「教育的」の項目では0名対3名と経験なし群の方が逆に多くなっていた。また、経験なし群には、こちらの気持ちを「表情でしっかり表わす」という記述も見られていた。なお、両群とも「保護者」に関す

る回答は少数であった。

## 考 察

### 1. 保母の加配について

現在受け入れている障害児に対する保育上の困難点の1つとして、午後には加配保母がいなくなり、子どもの介助等に困るという記述が2名に見られていた。また、子どもとかかわる上での記入者の悩みに関しても、表5に示したように、加配保母の必要性に言及した記述が3名に認められた。そして、この5名は全員が経験なし群に属していた。本研究では保母の経験年数を聞いていないため、障害児保育が未経験の保母が必ずしも保育経験が短いとは言いきれないが、統合保育を継続している園の場合には、ある程度これが当てはまる可能性があると考えられる。もし、この仮定が正しいならば、障害児保育の経験と一般の保育経験の両要因がこの結果に関係していると考えられる。保育経験年数を統制しての検討が今後の課題であろう。

ところで、広島市では障害児1名に対して4時間の保母加配を行っているが、障害児保育の経験のない保母を配置せざるを得ない場合もあることが指摘されている。こうした際の問題は、子どもへの働きかけ方のみならず、働きかけ自体が過剰になりがちな点にあると考えられる。保母と子どもの関係が深まる程、子どもの依存は強まり、逆に間に入る余地のない他児からのかかわりは減少していくであろう。統合保育に熱心なある幼稚園のように、「その子がより普通児と一緒に活動していくことが出来るよう」（加藤、1990）援助していくことが重要であり、それが満足に行われていない現状が表5に見られるような経験あり群の悩みとしても表現されているのであろう。常勤の保母だけでなく加配保母に対する園内外での研修も、今後さらに充実していく必要があると言えるのではないだろうか。

### 2. 保育上の配慮点について

記入者が感じている保育上の悩みについては、全般的に見ると経験の有無による差はあまり明確であるとは言えなかったが、配慮点に関しては両者間で大きな違いが認められた。それは、記入した人数や記述の総数の違いからも明らかであろう。

さらに、表6の「子どもの気持ち」の記述からは、経験あり群では子どもの気持ちや要求などをしっかり受けとめていこうとする姿勢が明確であることがわかる。また、「観察」、「触れ合い」、「遊び」、「ほめる」、「メリハリ」などでも記述が多い傾向が見られた。経験がある保母は、経験のない保母と比べて、子どもの気持ちや要求などをより理解し、積極的に子どもと触れ合い、しっかりと遊び、出来たことをすかさずほめていこうとする一方で、援助やかかわりのタイミングを見計らいつつ、メリハリのある一貫した対応を心がけていると言えるだろう。また、保育者と子どものかかわりにとどまらず、子どもと「他児との関係」にも気を配り、「保育者間」の連携を図りながら、障害児保育に「園」全体で取り組んでいこうとしている様子もうかがわれる。一方、経験なし群は「笑顔」を心がけたり、どちらかと言うと「教育的」なかわりを意図したりと、言わば子どもとの間とり方を模索している段階にあると考えられよう。

経験ある保母の以上のような配慮点は、本来全ての子どもに対して必要な保育態度でもあるだろうが、障害児とのかかわりから得られた実践的な対応方法として参考になる部分も多いであろう。

また、今回は分析の対象にしなかったが、経験あり群の子どもの見方として、子どもの長所や小さな変化などにも目を向け、子どもを全体的肯定的にとらえようとする態度が記述内容から示唆された。このような見方の重要性は既に指摘されていることではあるが(大石ら, 1990), この点に関する検討も今後に残された課題である。

### 3. 保護者との関係について

保護者との関係についての悩みは、表5にあるように経験あり群となし群の間でそれほど違いはないようである。そして、これは配慮点に関して

も同様の傾向である。すなわち、両者とも似たような悩みを抱えながら、障害児保育の経験がその対応に生かされているとはいにくい状態にあると考えられる。本研究では障害児保育の対象児以外にも様々な不適応行動を示す子どもが報告されたが、こうした子どもを目の前にすると、母親の養育態度や家庭の問題がつい取り上げられがちになる。しかしながら、母親達も接し方や将来のことなどで日々悩み、不安を感じながら生きているのである。保護者との信頼関係を作るためには、先ず話を何でも聞くことから始めて、こうした悩みや不安を受けとめ、一緒に考えていったり、具体的な援助方法を伝えたりしていくことが必要である(井田ら, 1992)。精神遅滞の子どもでは、他の障害の場合よりも保護者の問題が多く出されていたが、これらの解決のためにも基本的にはこのような受容的な姿勢で臨んでいくのが望ましいと考えられるであろう。保護者への対応に関しても、子どもの場合と同じように、保育者間の連携や園全体の協力体制、研修の機会などが今以上に必要であることが、本研究の結果から示唆されていると言えよう。

## 文 献

- 広島市 1994 平成6年度新規採用保母研修資料。  
井田範美・小山 望・柴崎正行編著 1992 基礎から実践までの障害児保育。ひかりのくに。  
片山義弘・片野隆司編 1993 幼児教育・保育講座 15 障害児保育。福村出版。  
加藤惟一 1990 葛飾こどもの園幼稚園紀要第8号。学校法人希望学園 葛飾こどもの園幼稚園。  
大石益男・肥後功一 1990 言葉の発達相談に見る指導・援助という関係。国立特殊教育総合研究所教育相談年報, 11, 13-22。